# 『女子高生が語る不思議な話』について

久保孝夫

## はじめに

北海道の函館大妻高校の生徒の間に広まるうわさや怪談話などを六年がかりで調べて収録した『女子高生が語る不思議な話』（一九九七年、青森県文芸協会出版部刊）について、まず第一に、「伝承事情」として、伝統的な昔話語りの世界と女子高生が語る現代民話の場合の比較をする。次いで第二に、「不思議な話が生まれた背景と土壌」について事例をあげて考えてみたい。

この本には、情報や流行に敏感な女子高生が、モダンホラーの枠組みに入る類話を、時に笑いを交え、時にブラックユーモア風に語る約一、二〇〇話が載っている。約一、〇〇〇人の生徒からアンケートや聞き取り調査を行った二、〇〇〇話の中から再編集した。これらの話は友達から友達へ、クラブの先輩から後輩へと語り継がれるだけでなく、テレビ・雑誌からも大きな影響を受けている。うわさ話の中に思いがけない出来事やふしぎな未知の世界へのあこがれや欲求を秘めているように思われる。

生徒が語る話の特徴として、死や霊にまつわる話が多い。一方、車や電話、写真など今の生活になくてはならぬものまでこわい話の種になっている。(注1)

また、車社会やファッションなど今の若者の関心などが見えてくる。若い世代がおもしろく感じている対象の変化が話にも現われている。笑い話や怪談はいずれも淡々と進めて、聞き手を引きつけておいて最後の一言でどっと笑わせたり、思い切りぞくっとさせる。あっと驚くオチをつけるのも、テレビのお笑い番組の影響から、話の受けるコツやことばを選ぶセンスの鋭さは女子高生も十分もっている。

全国的によく似た話が広く分布している。学校という共通の場が、他の学校であった話も自分たちの学校の怪談として抵抗なく受入れていく要因となっているのかもしれない。場所については、身近な地域を特定することで信憑性を増しているが、「友達から聞いた話です」と、また聞きが大半で事実や根拠がない。

表1　話の分類と話数

| 項目 | 内容 | 話数 | 占有率% |
|---|---|---|---|
| 家 | 毎日住んでいる家。一番安心できる場所であるはずのわが家が、時には怖い空間にかわることができる。 | 七七 | 六・五 |
| 学校 | 日中は生徒たちの活気に満ちている学校。放課後の校舎は妖怪の気配が…。 | 一六二 | 一三・六 |
| 病院・宿 | 病気をしたり、旅行して泊まる日常とは違う空間。眠れない夜が続く。 | 四二 | 三・五 |
| トイレ | トイレは一人だけの空間。ほっとした気分と隣りあわせに恐怖心が…。 | 六八 | 五・七 |
| 車 | 交通手段として欠かせない汽車や自動車。そこには事故や怪談が…。 | 九〇 | 七・六 |
| 道・トンネル | 車の時代になっても、夜道やトンネルには怪奇が満ちている。 | 六七 | 五・六 |
| 山と海 | 行楽にでかける山や海。それぞれの噂を宿してあなたを待っている。 | 八〇 | 六・七 |
| 墓 | 死体を葬る墓。その場所が一番こわいと思う人が多い。 | 六〇 | 五・〇 |
| 死 | 若い女子高生にも死の影はついてまわる。 | 一四五 | 一二・二 |
| 霊 | 霊はあるのか、ないのか。でも次々に起こる不思議な体験。 | 七五 | 六・三 |
| 怪 | 幽体離脱、心霊写真、火の玉、あなたのまわりにも怪しいできごとが…。 | 一二〇 | 一〇・一 |
| 写真・電話 | 現代科学の先端をゆく写真や電話。そこにも不思議な現象が…。 | 三八 | 三・二 |
| 夢 | 夢見が悪い、縁起の良い夢を見たと、人々は夢を前兆と見る。 | 三七 | 三・一 |
| 動植物 | 家族同様の犬や猫、そして庭の木にも不思議なことが起こる。 | 六四 | 五・四 |
| ことば | 「言霊」というように、古くから言葉には霊が宿ると考えられていた。現代の言霊は…。 | 六六 | 五・五 |
| 計 | | 一一九一 | 一〇〇・〇 |

話が語られている場＝空間を基準として、家、学校、病院・宿、トイレ、車、道・トンネル、山と海。他界との交渉という視点から、墓、死、霊、怪、写真・電話、夢。その他に動植物、ことばなどの一五に類別してある。

大人たちには、くだらないうわさ話と聞き流す人も多いが、耳を傾ければ若者たちの気質や生活の一部を知る情報がいっぱい詰っている。

一つの女子高校を対象にした継続的な調査は「現代民話」を知るうえで貴重なものとなろう。

## 一、伝承事情

**昔話語りの世界**　私にとって昔話との出会いは、弘前大学の学生時代に、津軽の村々の爺様婆様を訪ね歩いたときにはじまる。いろり端に座わって聞いた爺様婆様の語り口には独特の抑揚と方言のおもしろさがあり、わからずながらもふしぎな魅力となった。「藤崎サあんべ」（使いに出して時間が長くかかること。鉄砲だま）とか「横座さねまれば米買わせる」などということわざを知ったのもこのころである。（注2）

〔資料〕木造町館岡の洪福寺の工藤きえ婆さん（明治十六年生まれ）は、環境がお寺だけに仏教的な思想が濃いにしても、「むがしね、あったど」と語り始めると二時間位休まずによどみなく語り、その傍らでちいさなひ孫が目を輝かして、生き生きし

表2　伝承事情

| 項目 | 昔話語りの世界 | 函館大妻高校の場合 | |
|---|---|---|---|
| 語り手 | 祖父母・両親 | 生徒 | |
| 聞き手 | 孫・子 | 生徒 | 先生 |
| 人間関係 | 家族 | 学校 | |
| 形式 | タテ社会 | ヨコ社会 | |
| 伝承方法 | 口承 | 口承 | 書承（口承） |
| 話 | 昔話 | 世間話 | |
| 場所 | いろり端、寝床、作業場 | 教室、合宿所、修学旅行 | 教室 |
| 時間 | 夜 | 休み時間、放課後、夜 | 授業中、放課後 |
| 語り | 繰り返し | 偶発的 | 恣意的 |
| 語りの呼吸 | あり | あり | ない |
| あいづち | あり | あり | ない |
| 生活 | ゆとり | 秩序と規則の緊張を解きほぐすもの | |
| 雰囲気 | 安堵、ほっとする | 気ままに語れる自由さ | |
| 語りのかたち | 集中型 | 放散型 | |

た表情で聞き入り、「うん、それからさ」などと適切なあいづちをいれて、身体中でやきもきして気をもんだり、悲しんだり、よろこんだりしている。その姿は語り手と聞き手が啐啄同時（そったくどうじ）のことばどおり息が合い、一つに溶け合って昔話の語りの雰囲気を作り出して行く。婆さんが「とっちばれ」と一段落するとふと安堵の気持ちがただよう。まったくロマンの世界であり、すっかり時の経つのを忘れて、夜更けに月明りをたよりに夜道を歩いて家へ帰ったこともありました。

伝統的な昔話語りの世界では、場として家族が集まるところはいろり端であった。祖父母と孫がいろり端でのんびりと昔話を語る生活のゆとりがあり、タテ社会の人間関係[注3]でしっかり心身ともに結びついていた。もし、祖父母が夜業の手仕事（わら仕事など）していると、孫も夜業の手伝いをしながら聞く。孫は気にいった話をくり返し聞こうとする。適切なあいづちをうって、リズミカルに話がすすむ。くり返して話を聞くことによって昔話は伝承されていた。家族としていっしょに暮した長い時間の信頼感、安心感というものがあったといえる。話し手が中心にいて聞き手が周りで聞く形であり、集中型となり、ほっとする安堵感があった。

**函館大妻高校の場合**　昔話でいう語りの世界とはどうも次元が異なるように思われる。生活環境が変わり、祖父母の昔話よりテレビを見る。核家族により家族の絆も薄れた。生徒が語る話は友達から友達へ、クラブの先輩から後輩へと語り継がれてヨコ社会の様相を示している。昔話語りの世界で「生活のゆとり」と言い表すとすれ

ば、生徒の「ゆとり」は教室移動の合間であり、十分間の休み時間であり、放課後であり、合宿や修学旅行の宿のひとときである。生徒はいつもお互いに不思議な話を語り合っているわけではない。実際は、正規の授業の他に学校行事が一杯詰っているから、追いかけられている。

だからこそ、ふいに、何気ない時に、たとえば、理科の授業において、先生が理科室のストーブに手をかざしながら生徒を待っている時、早めに来た二、三人の生徒が同じく手をかざしながら、ふと「せんべい、せんべい、焼けたかな。どのせんべい、焼けたかな」とわらべ唄を口ずさむ。また、掃除をしている時にちょっとさぼって、廊下で立ち話をしている仲間のところに、「え、何に何に」と寄り集まってくる。十分足らずの短い休み時間にも生徒が集まって、語りの場が幾つもできるし、次の時間にはうわさとしてランダムに広がる。かたちとしては放散型である。話す人も話を面白くするために、尾ひれが付いて語られる。話は繰り返して聞くことなく偶発的である。

事例として、次の「大地震」のうわさ話がよい例である。

平成四年十月二十六日から二十七日夜にかけて函館市内の小中学生の間で「函館に震度8の大地震!?」というわさが急速に広まり、気象台など関係機関に問い合せが殺到、非常食を買い求める人も出る〝パニック〟があった、というもの。

その二、三日前から生徒が教室や廊下でひそひそと立ち話しているのを耳にして、「そんなことは単なるうわさ」と一笑に付しながらも、三十日、生徒二百五人を対

飛んだとんだうわさ

# 函館に震度8の大地震!?

## 〝震源地〟は不明の情報

## 小、中学生らに広まる

二十六日未明、函館を震度8の大地震が襲う!、二十六日から二十七日夜にかけて函館市内の小中学生の間でそんなうわさが急速に広まり、気象台など関係機関に問い合わせが殺到、非常食を買い求める人も出る〝パニック〟があった。

### 問い合わせ電話続々

気象台

うわさの内容はまちまちだが「変な女性霊能力者が東京発のテレビ番組で、函館と東京で二十八日未明に震度8の大地震が起きる」という。

うわさは数日前から市内の小中学校などで広がり、二十七日には電話が殺到、二十七日夜には九十七件にも上った。子供の話を聞いた親からの問い合わせも多かったという。応対に追われた函館気象台測候課の担当者二人は「こんな経験は初めて」と悲鳴を上げていた。北海道警函館警察署によると、二十七日夜までに二十件近い問い合わせがあった。

というのが共通点。この霊能力者は地震予知で有名な、アメリカに帰国したというお墨付きもついている。

うわさの中で、霊能力者は地震の小中学校などで広がり、二十七日には電話が殺到、二十七日夜には九十七件にも上った。子供の話を聞いた親からの問い合わせも多かったという。応対に追われた函館気象台測候課の担当者二人は「こんな経験は初めて」と悲鳴を上げていた。北海道警函館警察署によると、二十七日夜までに二十件近い問い合わせがあった。

函館海洋気象台には問い合わせの電話が殺到、二十七日夜には九十七件にも上った。子供の話を聞いた親からの問い合わせも多かったという。応対に追われた函館気象台測候課の担当者二人は「こんな経験は初めて」と悲鳴を上げていた。北海道警函館警察署によると、二十七日夜までに二十件近い問い合わせがあった。

ところが、うわさの中で、霊能力者が出演したいくつかの番組のビデオを放映したテレビ局の札幌放送局は「うちにも三十件以上の問い合わせがあった。その霊能力者が出演したいくつかの番組のビデオを放映したんですが、地震や函館のことは一切言っていない」と函館の表情は、この霊能力者のごく珍しい人も「日本での地震について発言したことは絶対ない」と言い切る。

まさに〝震源地〟不明の情報で、しかも函館以外でこうしたうわさが流れた形跡はなく、函館市内での局地的な現象のようだ。

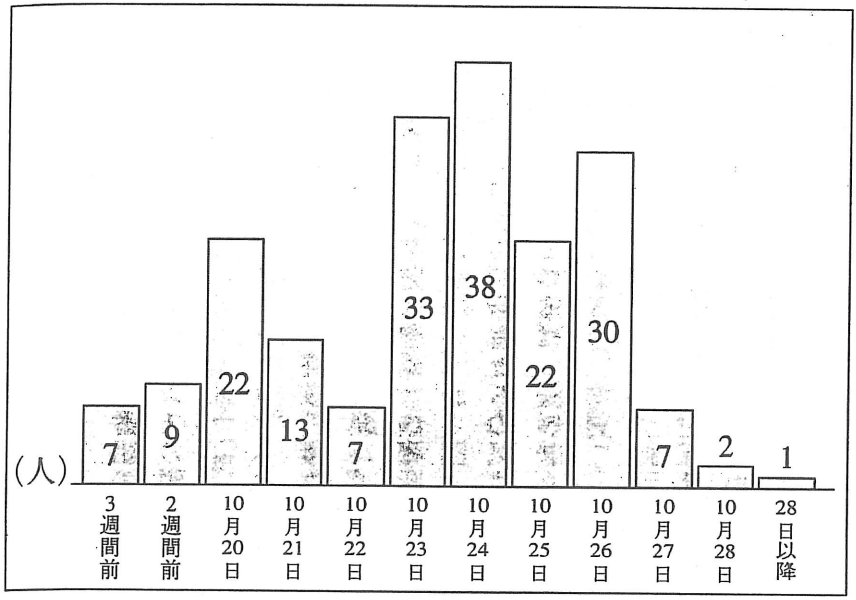
二十八日に地震がなかったことで、小中学生の間では早くも「地震は教育長に騙された」という新しいうわさが広まっているという。函館海洋気象台では「大きい地震のときは必ず前兆があるが、今はまったくない。うわさに惑わされない冷静さが必要です」と呼びかけている。

北海道新聞

1992年（平成4年）10月29日（木曜日）

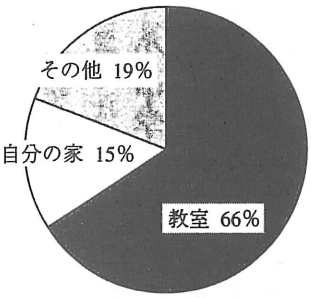
象にアンケートをとってみた。

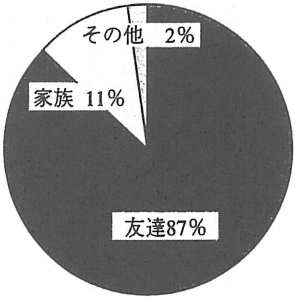
①「地震のうわさを聞いた日」は、十月二十三日が一七%、二十四日が二〇%、二十五日が一二%、二十六日が一六%で、急速に真実味を帯びてきた。（棒グラフ中の縦軸は人数。回収率九三%）



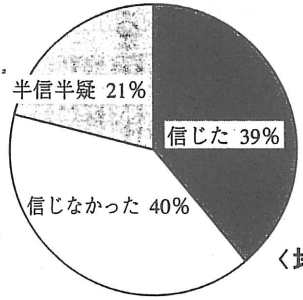

〈地震のうわさを聞いた日〉

〈地震が来るとどこで聞いたか〉




〈地震のうわさをだれに聞いたか〉




〈地震の話を信じたか〉

②「地震のうわさを誰にはじめ聞いたか」は、友だちが格段に多く八七%、さらに小・中学校へ通っている弟・妹や母親からというのも含めて一一%、実際にテレビ・新聞等で知った、先生からというのは合せてわずか二%であった。

③「地震がくると知った場所」（どこで聞いたか）は当然のことながら友だちと語り合う教室が一番多く六六%、次いで家族のだんらんの場所である自分の家が一五%。これらで四分の三以上を占める。

担い手である生徒たちは、学校という場でうわさ話がいの一番に発生し、伝播したのである。

④「どんな話の内容であったか」について、以下に二、三の事例をあげてみる。

○宣保愛子が、二十八日、函館に震度8の地震がきて、噴火するとTVで予言した。

○十月二十八日午前〇時、東京に震度10の地震が起こって、引き続き午前二時に函館で震度7の地震がくる。この日に来なければ一週間あとの十一月四日にくる。函館は海に沈没してしまい、市民の半分は死ぬ。

○宣保愛子と織田無道、韓国（または中国）の宗教団体の人が同じ予言をして、当らなかったら自殺すると言った。

○宣保愛子が二人の子どもを連れてアメリカ（またはアフリカ）へ脱出した。

○天皇陛下は中国訪問と言いながら日本から脱出した。

○縦揺れで、地割れや津波が起こる。駒ケ岳が噴火すると森町、砂原、鹿部が津波で沈む。

という内容であった。

⑤「地震の話を信じたか」は回答者のうち、信じた者三九%、信じなかった者四〇%、半信半疑の者二一%という割合であった。

ところで生徒たちがこのうわさ話を忘れたころ、表3のように大きな地震が続けて起きた。このことは偶然であろうか。筆者には一つの予兆であったに相違ないと思われる。

表3　主な地震

| 震央・名称 | 年　月　日 | 最大震度 | 函館震度 |
|---|---|---|---|
| 北海道釧路沖地震 | 平成5年1月15日 | 釧路　6 | 4 |
| 北海道南西沖地震 | 同　7月12日 | 寿都　5 | 4 |
| 北海道東方沖地震 | 平成6年10月4日 | 釧路　6 | 3 |
| 三陸はるか沖地震 | 同　12月19日 | 八戸　6 | 4 |
| 兵庫県淡路島地震 | 平成7年1月17日 | 洲本　6 | 0 |

（一九九五・三・一三　函館海洋気象台調べ）

**交通事故とトンネルの怪**　平成八年二月十日付、北海道新聞に「古平で国道トンネル崩壊、バスと車数台下敷き」というニュースが掲載された。

このトンネルとは後志管内の余市町と古平町にまたがる国道二二九号の豊浜トンネル（全長一〇八六㍍）のことである。豊浜トンネ

北海道新聞（夕刊）　1996年（平成8年）2月10日（土曜日）　第19208号（日刊）

# 古平で国道トンネル崩落

# バスと車数台下敷き

## 山崩れ土砂6千トン

### 乗用の女性1人脱出

北海道新聞

夕刊

北海道新聞社

小樽支社

室蘭支社

苫小牧支社

サンワード貿易

トンネルの崩壊現場

ルの悲惨な事故が起こった時、すでに生徒が語る現代民話の中に「豊浜トンネル」(注4)のことが語られていた。

〔資料〕私の兄が豊浜から帰ってくるとき、引っ越しの手伝いをするのに、母が行ったときの話です。行く途中にトンネルが三つあり、真ん中のトンネルが長くてうす暗く、いつもなら水がトンネルのなかで落ちるはずなのですが、その日に限って水滴が落ちていませんでした。そして、兄が、「変だな。でも母さんが来たから何ともない」と言ったのを聞き、母が後ろを見たら、車の横に髪の長い女の人が、顔の目のところから血を流し、恨めしそうな顔して、青白く細い手で、母の首から肩にかけて手を伸ばしてしがみついてきたのです。兄が、「顔色悪いよ。どうしたの」と言ったが、兄が運転しているので事故でも起こすと悪いと思い、母は何も話さなかったのです。そして、函館に着き、母が具合を悪くして、占てもらったところ、やっぱりその女が憑いてきたのです。その女の人は以前に、そのトンネルのそばで事故を起こして車ごと落ちて亡くなった人だったのです。供養してもらいたくて憑いてきたそうです。

数多くのトンネル内もしくはその周辺で発生した交通事故や怪異現象の話がある中で、特に「豊浜」の名が出てくることはトンネルを通るドライバーたちには得体の知れない恐怖感があった。遭難にあった家とか遭難した人の場に立って見るとき、人がどんなふうに遭難したか、その人が亡くなったことによってその家の人がどうなって行くか。そして本当に気の毒だという、生きている者にとって非業の最期を遂げた死者に対する憐憫の思いが、何年か後に新たなるトンネルの怪異話として生まれるかもしれない。

## 二、不思議な話が生まれた背景と土壌

**創造力が豊か**　生徒は日ごろなんらかのうっ積した感情をおしゃべりの形で発散して過している。放課後やクラブ活動の合間に、時に授業中にすらおしゃべりをする。夕べ見たＴＶ番組の話であり、

歌手・芸能人、またはプリクラ、カラオケなどの話が主である。

日々繰り広げられる出来事をテレビやラジオ、新聞の中からするどい臭覚（しゅうかく）で嗅ぎ取り、新しい話を作る力ももちあわせている。たとえば、

平成七年五月十六日付、北海道新聞夕刊に「民家床下から女性の変死体」というニュースが掲載された。

【函館】十六日午前八時四十分ごろ、函館市美原三ノ二八、無職○○さん（六三）宅の床下に、女性の死体があるのを家屋の改修工事をしていた作業員が見つけ、函館中央署に届け出た。同署は身元の確認を急ぐとともに、死体遺棄の疑いで捜査している。調べによると、死体は一部が白骨化、死後数年たっているらしい。衣服は身に着けていた。

○○さんの妻、△子さん＝当時（五一）＝は一九八九年三月から行方不明となり、家人から捜査願が出ている。同署は△子さんの可能性が高いとみて調べている。○○さん宅は十五日から改修工事を始め、死体は畳の交換作業中に見つかった。（氏名は伏字…筆者）

当日は、「オウム真理教の教祖逮捕」というニュースと重なり、ほとんど人の目にふれなかった。その後、五月二十七日、同朝刊にNEWS追跡「頼みの綱は〝記憶の糸〟」と題し、再び載った。調査は長期化し、平成十年三月現在も容疑者特定につながる有力情報は得られていない。

生徒が語る現代民話の中に「民家床下から女性の変死体」にまつわる話が出てきた。(注5)

**奥さんがたたみの下から**　これはつい最近、本当にあった話です。ある家で旦那さんが船乗りで家にあまりいなかったのです。ある日、帰ってきたら、奥さんがいないので不思議に思い一生懸命さがしました。何年も奥さんが帰ってきません。それである日、配管か何かでたたみをひっくりかえしたら人骨が出てきて、調べたら奥さんだったそうです。話では殺害されたということですが、その後は知りません。

新聞による話が一つの変容をとげながら伝播する例として、死者に対する憐憫の思いが、三年後に新たなる怪異話として生まれたのかもしれない。

**話の出所**　どうしてこれほどの話を集めることができたか。記録した不思議な話は、最初、生徒のおしゃべりの中から生まれた。小耳にはさんだのを記録したいと思うが口伝えでは思うようにすすまない。ついに「どんな話を知っているか教えて」「紙に書いて」と言って集めた。年に一回か二回のチャンスながら聞けば答えてくれる。定期テストの回答をし終わってから残りの二十分位に書いてもらったものもある。

生徒は怖い話を好む。いずれも死や霊についての話が多い。この本『女子高生が語る不思議な話』の礎になったのは、研究集録『大妻』に載った「高校生が語る現代民話」である。親しい教え子たちが、こんな話があるよ、と「外された鏡」(注6)を語り聞かせてくれたのがきっかけで、メモを集めて、平成四年度『大妻』の第六号から継

続して第十号までのものを掲載したものである。

**外された鏡**　ある学校の廊下に大きな鏡があって、その前に幽霊が出るという噂が広がったそうです。一人の勇気ある女子生徒がその話を聞いて、鏡の前に幽霊が出るかどうか学校へ見に行きました。でもその鏡には自分の姿が写っているだけでした。つぎの日の朝、女子生徒がみんなに、「あんな話は嘘よ。私、昨日の夜、学校に来てその鏡の前に立ったけど自分が写っていただけだったわ」とすまして言ったそうです。するとそれを聞いていた他の生徒たちが青ざめながら、「あの鏡は幽霊が出るという噂になったので、昨日の夕方、取り外されたのよ。あなたが行った昨日の夜には、あそこに鏡はなかったのよ」と言ったそうです。

**表4　高校生が語る現代民話**（研究集録『大妻』より）

| 年度 | 参加生徒数 | 採集話数 | 発行日 | 号数 |
|---|---|---|---|---|
| 平成4年度 | 二六八 | 五一〇 | H4・9・5 | 6号 |
| 5年度 | 二五七 | 二四九 | H6・3・21 | 7号 |
| 6年度 | 二三五 | 五三五 | H7・3・31 | 8号 |
| 7年度 | 二四七 | 三五二 | H8・3・31 | 9号 |
| 8年度 | 二一八 | 二五八 | H9・3・31 | 10号 |
| 9年度 | 一七六 | 四七七 | H10・3・31 | 11号 |
| 合計 | 一四〇一 | 二三八一 | | |

ちなみに、『大妻』は、昭和六十二年の創刊から平成十年までで十一年（十一号）を数える。

**服装検査**　常光徹『学校の怪談』のはじめに、「子どもたちは怖い話がすきだからというだけの単純な理解では片づけられない奥深い問題が背後に控えているということだ」[注7]と述べている。

函館大妻高校の生徒にも当てはまるのか。生徒を取り巻く生活環境は多様であり、生徒は学校で決まったカリキュラムに従って規則正しい時間にしばられて授業を受け、また種々の学校行事をこなしている。

この話「外された鏡」が生まれた頃、たまたま学校においては髪型が生活指導上の問題であった。一部の生徒とはいえ休み時間、廊下の鏡の前で櫛を持ち、逆髪（さかげ）を立てるというしぐさで髪型を直す。授業開始のベルが鳴っても教室に入ろうとしない。担当教科の先生に追い立てられてやっと教室に入る。出欠をとろうとすると、「先生、トイレ」と席を立つ。あまりにも目に余るものがあって、生活指導の先生が如何しようかと悩んだ末、廊下の姿見は取り外した。以前は玄関、階段、廊下の隅々に十五、六個所あって、加我美（われにうつくしさを）（鏡（くわえる））といっていたものがなくなった。姿見は五、六個所、数えるしかない。トイレの中も顔を写す小さな鏡が手洗い場に飾られているだけである。おしゃれが気になる年頃の生徒にとって不自由きわまりない。最近は各自がコンパクトな手鏡を持ち歩いている。

規則でがんじがらめに縛っている。頭の先から足元まで一つの姿

かたちが決められている。制服が決められているのはもちろん、頭が染毛だの、耳にピアスの跡があるだの、爪にマニキュアがついている、スカート丈が短い長い。ルーズソックスはだめ、白ソックスの学校指定などたくさん上がってくる。

生徒が上靴のかかとを踏んで、いわゆるスリッパ履きしていると、理事長先生は、「こら、靴」と叱り、直すまで立ち止まって生徒を見ている。筆者はときどき、「嬶、父を踏む」と言って旦那を踏みつける奥さんになる、と口にする。

しかも生徒は学習とは異なった服装検査という関門を毎日通り抜けねばならない。先生方は、基本的生活習慣を正し、姿かたちを厳しく観察・注意する。各学期毎に一回、三学年合同の服装検査と、月一回の学年毎の服装検査があり、毎日朝夕玄関指導、路上指導と称して先生方が二、三人立つ。生徒にとっては窮屈だ、うるさいと思うことであろう。筆者は「叱られるうちが花なのよ。叱られなくなったらお仕舞だ」と言っている。生徒は、どっこい生きているという感じである。

**校長先生の死**　さらに、常光徹は『学校の怪談』の中で、「校長先生の死」(注8)にまつわる次のような話を紹介している。

〔資料〕子どもたちは、怪異そのものに興じる一方で、学校の顔である校長先生を日常の話のレベルにまで引きおろして面白がっている側面のあることも指摘しておこう。「真夜中に校長先生が青い山脈を歌っている」「校長先生の顔写真が声をたてて笑う」「死んだ校長先生がバレーの試合で声援を送っている」等々、いずれも気味悪い話にはちがいないが、しかし、いくらか皮肉っぽくというか、校長先生という常日頃のかたいイメージを話の上にダブらせて想像すると、そこには、むしろ笑いの要素が膨張してくる。

このことについては、函館大妻高校の生徒はどうであろうか。表5の体験談の中に、「怖いというよりぜひ会いたい」ということばが示すように、外山ハツ先生という一人の偉大な教育者がいまでも同窓生はもちろん生徒の心の中に生き続けている。

本校は、大妻女子大学学祖、大妻コタカ先生の承認により「大妻」の二文字をつけた学校として大正十三年に創立された。初代校長外山ハツは建学の精神に良妻賢母をかかげ、しつけ教育をうたい、厳しかったという。校訓は「恥を知れ」。

昭和三年卒業で本校の先生をしておられた西田タカ（明治四十四年生まれ）の話によると、「昔は生徒は廊下で縫い物を広げて裁縫をしました。廊下は雑巾がけで磨きに磨きをかけ、鏡のようにテカテカしていました」という。今もその名残があって朝夕雑巾がけをし、昼には箒で掃かせる。「トイレをきれいに掃除すると美人になる」(注9)といって、トイレ掃除もさせる。

当時は、ハツ先生や副校長の神田マスコ先生は校内巡視をして、生徒の学習態度や先生方の授業の様子などそっと見て歩いていた。その話が伝説となって、ハツ先生が九十歳で亡くなって十五年経つ今も語り伝えられている。

表5　函館大妻高校での体験談など

| 表題 | 内容 | ページ |
|---|---|---|
| 見廻り | 初代校長の外山ハツ先生が水曜か金曜の十二時に校舎を見廻る。 | 二七 |
| 鏡 | 外山ハツ先生が五時三十分に職員室を出て生活情報科前廊下の鏡の前を五時四十五分に通る。 | 三三 |
| 大妻の七不思議 | 放課後体育館の真ん中で縄とびすると外山ハツ先生が車いすに乗り笑顔で見てる。怖いというよりぜひ会いたい。 | 三六 |
| 鏡に写った先生 | 夜遅く、音楽室の前の鏡に車いすの外山ハツ先生を見た。 | 五〇 |
| 白い服の女 | 五時近くに初代校長と神田マスコ先生が見廻りにくるというわさがある。音楽室から出るとうしろにスリッパの音が聞える。 | 五〇 |
| テストで百点 | よい行いする人の夢の中に外山ハツ先生が出るとテストで百点とれる。 | 二二五 |
| いましめ | わるいことをする人の夢の中に外山ハツ先生が出てきていましめをする。 | |

平成十年四月二十日、外山ハツ先生の胸像の除幕式があった。本年は本校創立七十五周年、同窓会を設立して七十周年になる。関係者七十人位が食堂で直会を無事終わっての帰り、正面玄関に来ると、運動部の生徒五、六人がハツ先生の胸像の鼻や胸を撫でている。どうした、と尋ねると、「試合に勝つ」「鼻が高くなる」「胸が大きくなる」と言いながら、けらけら笑って走り去った。外山ハツ先生を知る年老いた二、三の同窓生が、胸像の前で拝むようにして手を合せ、一つの吐息をして、喜んで帰ったあとだけに、むべなるかな、という思いであった。

不思議な話が生まれる要因の一つには、以上のような背景と土壌があった。

## おわりに

今後の課題として、

一、この本の序文に、(注10)「聞き取りの対象を同じ手法で、例えば鹿児島県あたりの女子高生の不思議話が収集されるならそこに一つの比較の基準が生まれてくる」とあるが、そうした地域性を考慮に入れた作業を取組むことは出来ないか。

二、本稿では女子高生が生活する学校の問題として、服装検査を一例にあげた。服装自由な公立高校や男子高校生はどのような不思議話を知っているか興味がある。

三、古い話型にはなかった、電話やカメラ、自動車、テープレコー

ダーなどが素材になっていたり、重要な役割を果たしている。（時には、こわい話だけでなく笑い話を生み出している。たとえば「テレカ」「半クラ」など）。「明らかな近代社会の産物が、われわれの生活のなかに入り込み、怪異の表現として熟成していることも発見できる」[注11]。これからも不思議な話はどんどん生まれるだろう。

注記

（1）車社会については、「車社会」（池田香代子・大島広志・高津美保子・常光徹・渡辺節子『ピアスの白い糸』白水社、一九九四、十三頁）に取上げられている。

（2）この点についてはすでに、拙稿「伝承事情」（稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観』№2青森、同朋舎、一九八二、六六四頁）で述べたことがある。

（3）中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社、一九六七、七〇頁。理論的に人間関係をその結びつき方の形式によって分けると、「タテ」と「ヨコ」の関係となる、と指摘がある。

（4）トンネルについては、「交通事故とトンネルの怪」（近藤雅樹・高津美保子・常光徹・三原幸久・渡辺節子『魔女の伝言板』白水社、一九九五、一六九頁）に取上げられている。

（5）「民家床下から女性の変死体」『研究集録大妻』第十号、函館大妻高等学校、一九九七。

（6）鏡については、「鏡」（池田香代子・大島広志・高津美保子・常光徹・渡辺節子『走るお婆さん』白水社、一九九六、九七頁）に取上げられている。

（7）常光徹『学校の怪談』ミネルヴァ書房、一九九三、二頁参照。

（8）同右、五六頁。

（9）西田タカとの対談の一部。「櫻の木に櫻の花が咲く」（拙著『花文のひとひら』函館大妻高校、一九八七、三六頁）参照。

（10）このことについては、宮田登の「序文」（拙著『女子高生が語る不思議な話』青森県文芸協会出版、一九九七）参照。

（11）このことについては、小池淳一の「『女子高生が語る不思議な話』の書評」（『Oshimanography』№5、自然史研究ネットワーク二〇〇〇「みなみ北海道」、一九九八）参照。

付記

本稿は、日本口承文藝學会第二十二回大会研究発表（一九九八年六月）の草稿をもとにまとめたものである。発表に先立っては、世間話研究会の各位、小池淳一、佐々木達司、常光徹、花部英雄の各氏、会場では梶田純子氏ほかから、貴重なご教示をいただいた。

（くぼ・たかお／元函館大妻高等学校教諭）